大沼法竜著

方便法身 真実之 浄土真宗

敬行寺発行

昭和 48 年　　78 才

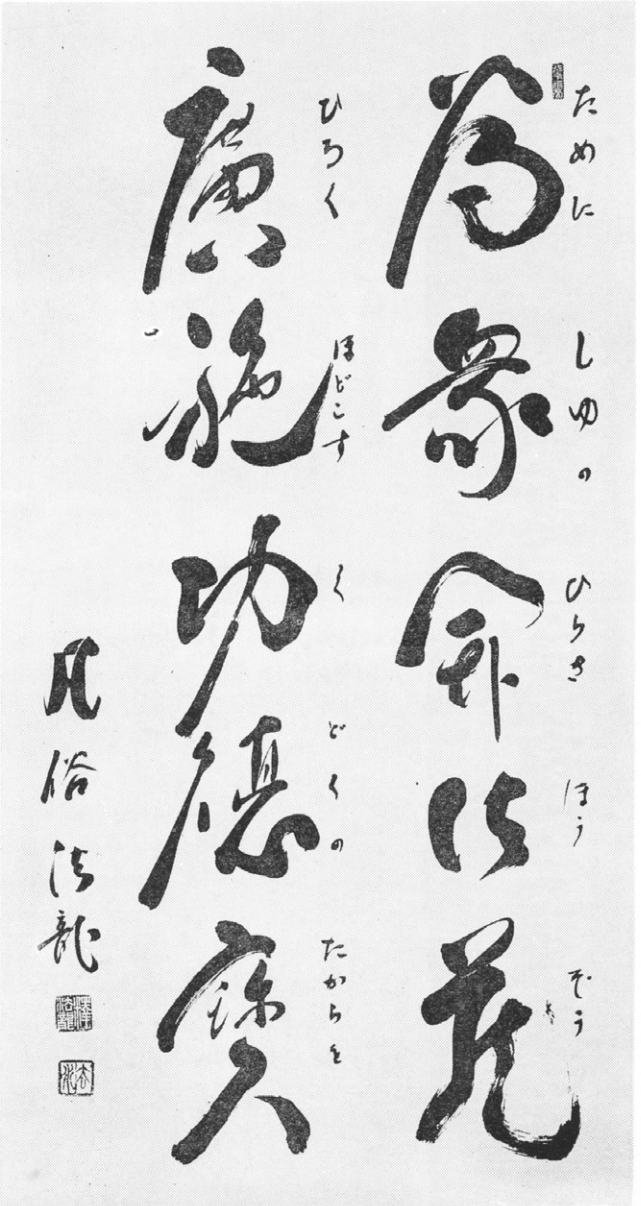
陳かれた実感に乏しい人には

嗜隙五逆誹謗正法

若不生者不取正覚

救はれた体験は絶対にない

化信北傳法記


為衆命以光
廣施功德寶
ためにしゅのひろきほうぞう
ひろくほどこすくどくのたからを
氏俗法龍

たとひみをもろくもくどくもふかに おくとも

仮令身上諸苦毒中

わがぎょうはしょうじんにしてしんびて ついに くゆ

我行精進忍終不悔

北條氏康 法名

はしがき

◎

合掌、南無阿彌陀仏、なむあみだぶつ。私がお念仏しながら書いているのですから、読んでくださる方々も、お念仏を称えながら読んでください。宗教は、抜苦与楽であります。苦毒の中におりながら苦のわからない人間は、晴れた世界を知りません。光明無量の作用で、苦を苦と知らしていただいて苦を抜いていただき、寿命無量の作用で無限の楽を与えていただくのです。

◎

浄土真宗は絶対他力といいますが、絶対の自力のつきた後に顕われるのが他力不思議であります。阿彌陀さまは絶対の慈悲と申しますが、裏には絶対の智恵があります。悲智円満なお方でありますから、妄愛は赦されません。曖昧な信仰を赦せば、絶

対の慈悲ではありません。

◎

六字の尊号、南無阿彌陀仏は、阿彌陀とは光明無量の智恵と寿命無量の慈悲の覚体、空間的無辺、時間的無限の真理であります。それを覚ったお方が仏、この阿彌陀仏が無智無明の私を救わんがための無縁の大悲とは知らなんだ、お任せ致しますと信順したのが、南無の二字であります。信順無疑したときは、仏凡一体になったのでありますから、明らかな智恵を信受したのですから愚痴がなくなり、深い慈悲を諦得したのですから不安がなくなり、ありがたい、勿体ないと感謝法悦の生活になり、真俗二諦の行儀にならなければ如実の信とはいえないのであります。

◎

六字の徳号を開説したのが、第十八願であります。光明無量に照らし出されたのが抑止門の八文字の唯除五逆誹謗正法、寿命無量の慈悲に摂取されたのが若不生者

不取正覚の八文字、信順無疑し南無したのが至心信楽欲生我国の八文字であります。十方衆生よ自惚れるなよ、ひとり残らず逆謗の屍であるぞと自覚を促してあるのです。自分が逆謗の屍とは知らなんだと驚いたとき、自力の機執が捨たり、如実の信となり、第十八願を諦得したのであります。

◎

その境地に到達し切らない、自惚れのやまない、聞損の機が第二十願、第十九願、八万の法蔵と桁を落としているのです。八万の法蔵はこの聞損の機を調機誘引して、方便から真実に誘導してあるのですから、この道を通らなければ不退の位まで進まれないのであります。だから聖人は「真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失する」と仰せられたのであります。このたび浄土真宗か浄土仮宗かという題で二百五拾の解説をして、方便から真実に誘導するのであります。

◎

浄土真宗と看板を掲げていましても、信楽開発していなかったら浄土仮宗です。法は尊高であっても、機に不安があったら助かっていないから浄土仮宗です。

聖人は「無上の妙果の成じ難きに非ず、真実の信楽、実に獲ること難し」、「是を以て無上の功徳、値遇し難く、最勝の浄信、獲得し難し」と仰せられてあるのに、どなたも難しいとおっしゃらないのは、どこか抜けたところがあるのではありませんか。あのお言葉を無視して、他力だから易いとおっしゃるのは、実地の求道をなさったことがないから妙味が受け取れないのではありませんか。なるほどそうか、そうかと合点して素通りしておいでになるから、如来如実の言が聞こえないのではありませんか。

名号に向いておれば、みな第十八願の道俗だと思っておられましょうが、第十九願の万行随一の念仏もあれば、第二十願の万行超過の念仏もあり、信仰が徹底し、仏凡一体になった第十八願の自然法爾の念仏もあるのですよ。真仮を知らないのですか

ら、真仮の門戸を知らず、邪正の道路を弁うることなしに当たりはしませんか。

◎

浄土真宗とは実地の求道をして、仏智が満入して仏凡一体を体験し、現生不退で心命終した大満足の境地ですよ。

浄土仮宗とは観念の遊戯をして、感情がお聖教やお言葉に調子を合わして、身命終の往生を楽しんでいる信仰をいうのですよ。

聖人が実地の求道をなさって後生が苦になり、煩悶をし、聖覚法印に「生死の苦海を渡す舟人は、法然上人より他にない」と聞かされて、訪ねられるまでは無明の闇に閉ざされて苦悶し、「教の理致をきはめて、これをのべ給ふに、たちどころに他力摂生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の真心を決定しましましけり」。たちどころにとは、何時とはなしではありませんよ。法然上人の前に行かれるまでは無明の闇、聞き開かれたときが、聞即信の一念、「無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり」。五劫

思惟の願は親鸞一人がためなりけりの大慶喜を得て帰られたのですから、開発したか、しないか判らないような信仰ではありません。行かれる前が信前、帰られるときが信後、この水際を鮮やかに諦得されたからこそ、真仮の分際を撰別されるのが聖人の出世本懐、真の使命であったのであります。

その真実無我の大満足の境地に到達するには第十九願、第二十願の方便を通らなければ真実に入れないと開覚してみれば、彌陀の本願から釈尊の説法から七高僧の教示までが、みな方便から真実に誘導する御教化であったことに驚かれたのでありました。

ところが、話がわかったのは信仰ではありません。言葉でなければ導かれません、言葉を離れなければ、不思議の仏智は諦得できません。真似から真物になるのです、贋物から本物になるのです、方便から真実に入るのです。話から実地の求道になるのです。権実真仮を知らなければ、仏法の妙味を諦得していません。

今から仮宗の人たちの気持ちと、真宗の人たちの気持ちとを比較対照してみますから、自分はどの位置にいるか検討して前進してくださいよ。

1 仮＝頭が合点して、法の話を理解しただけの信仰。
真＝実地に求道して、大満足をした信仰。

2 仮＝晴れたのやら暮れたのやらわからぬ信仰。
真＝うんともすんともいわなかった自性が開発した信仰。

3 仮＝信前の者が信後の真似をしている贋物の信仰。
真＝信前信後を鮮やかに知らしていただいた信仰。

4 仮＝何年経っても同じ位置にいて、一寸も進み切らない信仰。
真＝信仰が進むというのは、聞けば聞くほど有り難くなった信仰が、聞けば聞くほど動かぬ心が見えてきて、寝食を忘れて求道するようになることです。

5 仮＝後生が一大事にならぬ信仰。

真＝罪悪観と無常観に攻めたてられて、必死の求道の後に開発した信仰。

6 仮＝仏さまの仰せに間違いないと素直に聞いている信仰。

真＝素直にない心が照らし出されて、三定死の求道の後に素直に信順した信仰。

7 仮＝この世はどうもなれないから、死んだらお助けと死後を楽しんでいる信仰。

真＝現在の延長が未来ですから、現在の開発のない者は未来は救われないと求め抜いた人の信仰。

8 仮＝信前信後の水際のない人の信仰。

真＝一念の信を突破させた人でなければ、信前信後の水際は立たないのです。

9 仮＝何時とはなしに話がわかっただけですから、切れ味のない信仰。

真＝三世の業障が一時に罪消えたのですから、信前の足どりがよくわかるのです。

10 仮＝堕ちる者をお助けと話がわかっただけですから、求道にも報謝にも真剣味がない。

真＝罪悪深重に驚いたのですから必死の求道をしているから、必死の報謝をするのです。

11 仮＝若存若亡の信仰です。

真＝法を見るままが機、機を見るままが法ですから、常住不変の慶びです。

12 仮＝お助けの法を眺めているだけですから、機の晴れた天地を知らないのです。

真＝仏智が満入したのですから、晴れて大満足をしているのです。

13 仮＝晴れて満足し切った喜びのない信仰。

真＝実地の求道をしているから、仏凡一体の大満足があるのです。

14 仮＝死んだらお助けで、いま摂取されていないから、凡夫は喜べるものでないと思っている信仰。

真＝無上の功徳を具足したのですから、大慶喜の生活をしています。

15 仮＝寝食を忘れて求道したことのない信仰。

真＝必死の求道をしたときの苦しさは、人世に比較するものがない。もう一度繰り返してみようとしても、心の底からほやりほやり微笑める世界。

16 仮＝自分は宿善が厚いと自惚れている信仰。

真＝信前では誰でもみな自惚れているのです、三千世界最第一の悪魔が自分であったと知らされた時、はじめて摂取されるのです。

17 仮＝機を見れば手間がかかると、機を包んでいる信仰。

真＝包んでも包んでも、噴き出る悪性のままが摂取されたのですから、慶喜に絶え間がないのです。

18 仮＝悪人正機の悪人を、三毒の煩悩としか知らない浅はかな信仰。

真＝自分が第十八願から除かれた逆謗の屍であったと深信させられたのです。

19 仮＝この世で助かった自覚のない信仰。

真＝二種深心が徹底したから、ふたたび迷わぬ身になった実感があるのです。

20仮＝この機はどうもなれないと思っている信仰。
真＝この機がどうもなれないままで行ける処は、三悪道ばかりです。本願を信受したら正定聚の自覚があります。
21仮＝この者をお助けと思っている信仰で、これは機法合体の桁にいるのです。
真＝平生業成が徹底したのですから、助かった嬉しさよの慶びです。
22仮＝不平や愚痴の出る信仰。
真＝摂取されて仏凡一体になったのなら、不平や愚痴が御恩を喜ぶ種になっています。
23仮＝十劫の昔に助かっていると思っている信仰。
真＝十劫の昔に助かっているのなら、信心も安心もいりません。信楽開発した信の一念で助かるのです、その開発が浄土真宗の極意です。
24仮＝この機に用事はないと思っている信仰。

真＝この機に用事がないのなら、十劫已来立たれる必要がありません。合点する機の下の動かぬ機を動かすための、親の念力です。

25仮＝喜べるときは参れそうな、喜べないときは落ちそうな信仰。

真＝自分の喜怒哀楽が往生に関係しない信仰です。

26仮＝善根をしたときは参れそうな、喧嘩口論をしたときは落ちそうな信仰。

真＝信に信功なく行に行功なしで、自分の行為を往生の助太刀にさせない信仰。

27仮＝晴れたか暮れたかわからない信仰。

真＝信楽開発するまでは、晴れたも暮れたもわからないが、信一念を突破さしていただいたから、晴れた味を鮮やかに体験さしていただいている。

28仮＝大慶喜のない信仰。

真＝煩悩と菩提とが体無二ですから、煩悩のあるところ何時も喜びは動いています。

29 仮＝自力がどんなものか知らない信仰。

真＝自力がつきた時に他力不思議に生かされたのですから、今までが自力に導かれていたことがよくわかります。

30 仮＝疑いがどんな心か知らない信仰。

真＝本人は疑ってはいないつもりですが、晴れていないのが疑っているのですから、疑って疑って疑い抜いたとき、疑いなく助かったという自覚がつくのですから、今までがみな疑いであったことを知らされるのです。

みなさん、法の他力の効能書ばかり聞かされて、自分の心の病気は一寸も見せてもらっていないのですから、素直な真似ばかりして、病気を包んで助かったつもりでいるのですから癌や無明業障の恐ろしい病を知らないのです。知らないのですから、療治は一寸もしていないのです。療治をしていないのですから、全快した喜びのある筈がありません。何年お聞きになっても、機を見ると不安が出るのです。それで凡夫は

判然とするものではない、煩悩はやまないのだと疑いと三毒の煩悩とを混同して、死ななきゃ治らないように思っているのが浄土仮宗です。これを方便の桁をうろついている信前というのです。

もういちど浄土仮宗の人の心持ちをいってみますよ。この人を信前の機、第二十願の人というのです。法の尊さを聞かされて感激はしていますが、悪い者と口ではいっていますが、機の醜さが判然と出ていないのです。ありがたい真似をしているだけで、実機が出ていないのですから摂取された実感がありません。三千世界を探しても、素直な人は一人もいませんのに素直な真似をしているのですから、晴れた天地を知りません。機を包んで法に調子を合わしているのですから、法が他力で機が自力ということを知りません。仏智満入とは痺れた心に届くのであって、機を見るのでないと包んでいるのですから、仏凡一体になれる筈がありません。一体になれていないから、大慶のある筈がありません。大慶喜のないのは摂取されていない、平生業成が確立して

いないからです。それで曖昧な、晴れたのやら晴れないのやら判らないから、若存若亡の信仰になり、凡夫は判然するものではない、死んだらお助けと思っている気休めをしている信仰が浄土仮宗、贋物であります。

これは心の病気が、照らし出されていないのです。三世の業障という恐ろしい病と聞き覚えただけで、観念の遊戯をしているのですから苦しくない、苦しくないから療治をしない、求道をしないから三仏から見捨てられた難化の三機、難治の三病が自分であることを知らない、邪見憍慢の悪衆生が自分であることを知らない、弊と懈怠が自分であることを知らないで、素直に聞いていると、話を聞いて理屈のわかったのを体験したと思っているのは机上の空論にすぎないから、全快した大慶喜がないのです。演習なら易いが、実戦は難しいですよ。第十八願から除かれたのが自分であったと実感したときの恐ろしさ、苦しさは、筆舌の及ぶところでありません。無常観と罪悪観に攻めたてられて三定死の境地に立ったときは、時化に遇い怒濤に呑まれている

のだから、九死に一生を獲たときの大慶喜は、机上の空論や、畳の上で居睡り半分に聴聞し合点しているのとは、同日の論でないことぐらいはわかるでしょう。真剣に求道されないのは、心の病気が見えていない、根機が熟していないからです。自分の心が満足するまで求道し、地獄一定が極楽一定にさしていただき、現在、仏智が満入し、十方法界わが物なりと大満足してはじめて信前信後の水際が立つのです。精神的の大満足を獲たから一切の有碍に障りなし、神通自在、無碍自在になるのです。物質の多少の問題ではなく、無一物中無尽蔵の生活ができるのです。私の起居動作が報仏と一体の起居動作になるのです。それが歓喜の生活であり、懺悔の生活となるのであります。この世で晴（開発）れて大満足の生活をさしていただくのを、浄土真宗の行者というのであります。

◎

今までは法ばかり眺めて、有り難がって観念の遊戯をしていたのですから、今から

は機ばかり見せていただいて、実地の体験をしなければ一体にはなれません。機を見るのが異安心なら、法ばかり眺めているのは無安心です。法を眺めているのが第二十願、この機が開発されたのが第十八願。

◎

身体が救われるのではありませんよ、心眼を開けば、いま摂取されるのですよ。

◎

今が生死の苦海ですよ、弘誓の船に乗りましたか、この人世が光明の広海と変わっていないのは、生死の苦海に沈んでいるからですよ。

◎

学問よりも体験の世界の尊さのあることを知らしむれば、私の出世本懐は達成されたのだから、これからは深妙の法を宣示さしていただきましょう。南無阿彌陀仏。合掌。

◎

利智精進の方がたは一度で理解ができましょうが、愚鈍な私が実地の求道をしたときの苦しさ、これを導いてくださる知識がなかったので、心の病気に気がついて泣いておられる方の味方になって、共に泣いてあげます、必ず晴れた世界がありますから、必死に求道してください。

◎

南無阿彌陀仏信前信後の水際のたたない人は、第十八願に摂取されてはいません。凡智がつきて仏智に生かされた人なら大決定、大満足、大歓喜、大懺悔があります。ない人は方便の桁にいるのです。方便から真実へ、調熟の光明から摂取の光明へ、浅心から深心へ、自力から他力へ、真似から本物へ、合点から体験へ、漸進するのが果遂の誓のうえを前進しているのです。